

特254

704

NOUVEAUX COURS DES RELIGIONS JAPONAISES

無 教 會 主 義

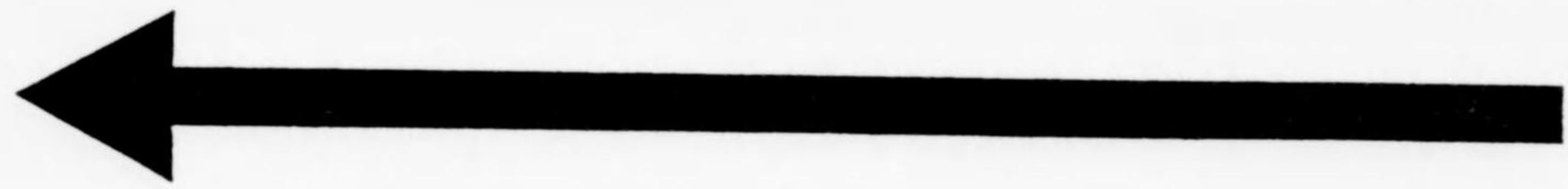
畔 上 賢 造



東 方 書 院



始



特254
704

無教會主義

畔上賢造

目次

第一 教派ではない	一
第二 起 源	二
第三 現 状	四
第四 教會に對する抗議	六
第五 無教會主義についての誤解	一〇
第六 聖書の基督教の提唱	一四
第七 信仰第一主義の提唱	一六
第八 日本的基督教の提唱	一九
第九 無教會主義の傳道法	二三

無教會主義

畔 上 賢 造

第一 教派ではない

近頃「無教會主義」といふことが、日本の基督教界の一つの大きな問題となつてきた。殊に教會側では之を大きな問題と考へてゐる。それは教會員の中に、今の教會にあきたらないで、教會を去つて所謂無教會者の群に投ずる者が相當に多いからである。各派の年會などに於て、無教會主義に對する對策を講ずるやうなことが度々あつたととき。斯様に無教會主義といふものが、現在の新教會に對して一の脅威となつてゐる事は事實である。

かくの如く、所謂無教會主義の擡頭は、最近の日本基督教會に於ける顯著な事實であつて、目下のところ全く日本特有の事柄である。しかし之について、人々の間に一つの根本的な思ひ違ひがある。それは無教會主義なるものを基督教の一派とみることである。しかし無教會主義は決して基督教の一派ではない。無教會主義の立場からみれば、基督教界に於ける宗派の存在は最も歎かばしいことである。故に自分自身が一の宗派でないといふことが、無教會主義成立の根本に存してゐる大きな精神である。無教會主義は教派ではなくて、一の精神である。他の教派と對立して一の新

しい教派をつくつたのではなくて、教派を超越し、或は教派別を無視して日本のすべてのクリスチャンに適用しうべき一の精神である。われらはすでに或るいくつかの教派を加へて、更に一つの教派をつくつて、僅かばかりの信者を會員として他と併立してゆかうとするものではない。形式や所屬は、われらの問題とするところではない。われらは日本のすべてのクリスチャンに、無教會的精神を以つてもらひたいのである。われらの目指すところは、少くともそこにある。それ以下を以てはわれらは満足しない。

無教會主義といふ言葉が穩當でないと云ふ人がある。われらもこの言葉を、われらの根本的精神を表現するための最も適當な言葉であるとは思はない。けれどもすでに斯様な言葉が出来てそれが通用するやうになつた上は、この言葉を保つても少しも差支ない。しかしそれが主義である以上に精神であるのだから、無教會的精神とか無教會的基督教とか云へば、一層適切であるかも知れない。しかし問題は名ではなくて實である。

第二起 源

内村鑑三氏（内村氏は私の恩師であつて、先生と呼ばねばならぬのであるが、この稿は自分を第三者に置いての故、氏と呼ぶことにする）は明治、大正、昭和を通じての、日本の基督教界の巨人と云はれる人である。無教會主義といふ言葉は、氏が自己の主張をあらはすためにつくつた言葉である。氏は青年の時はやくすでに獨立傳道を志した人であるが、氏の所謂獨立は單なる自給傳道といふ意味ではない。氏は外國人の事業としての日本教化を悉く斥けて、日本人だけの力を以てする日本傳道が基督教を日本にひろめる唯一の道であると考へた。そのころの日本に於け

る基督教傳道といへば、その全部が西洋人の事業であつて、西洋人を離れての傳道などいふことは、全く思ひもよらぬことであつた。しかるに氏が廿歳前後の青年にして、かかる意味に於ける獨立の必要を考へ出したといふことは、その非凡の人格を雄辯に語るものである。

氏は斯様な意味の獨立を先づ自ら試みようとして決意した。荊棘をきりひらいて先人未到の道を押す。む者の勞苦は、後進者のゆめにも思ひえぬものがある。迫害、誤解、誹謗、貧窮等は氏の味はねばならなかつた苦盃であつた。けれども氏は、忍耐と祈禱とをもつて目的に向つて一意精進した。先づ文書傳道の道をとることにして五六の著作をしたが、遂に明治卅一年に「聖書之研究」といふ傳道雜誌を公刊した。この雜誌には少くとも二つの特徴があつた。第一は經濟的の獨立であつて、内村氏自身がみづから經濟上の全責任を帯びて、全く獨自の仕事としてこれを始め、且つつづけたことである。眞心から出た無條件的の寄進は斥けはしなかつたが、自ら人に向つて經濟的の援助を乞ふやうなことは少しもしなかつた。特徴の第二は、その名の示す通り、聖書の研究がこの雜誌の目的であつたことである。舊新約聖書全體を學的良心と、敬虔なる信仰的態度をもつて學ぶことが、この雜誌の眼目であつた。基督教の傳道と云へば、内村氏から見れば、聖書の説くところを世に向つて傳へることであつた。斯様にして「聖書之研究」は世に生れ、卅年つづいたが、豫定のごとく氏の死とともに消滅した。これが日本最初の、個人の獨力を以てする聖書雜誌であつた。

内村氏はまた別に、氏の聖書講義の聽聞を願ひ出る者だけを集めて一の聖書研究會を創設した。これも卅年間つき、時によつて形式を異にし従つて會員の數に増減があつたが、その最も多いときは九百名を數へた。その集會の導

き方は、教會のそれとは全くちがふ。多くの人が氏を慕つて集まつたのであつて、自分の方から勧誘して来てもらふやうなことは絶対にしなかつた。また來會者をお客様扱ひにするやうなことも全くなかつた。洗禮をほどこすことも全くなかつた。また去る者は追はずといふ方針を嚴重に守つた。任意の會費を要求するほか、何一つ經濟上の面倒を來會者にかげなかつた。來會者は何等の束縛を受けることもなく、何等の不愉快を味はふこともなく、のびのびした氣持を持つて來會し、感謝に溢れて散會した。すべてに於て教會とは全くちがつたやり方であつた。

斯様に多數の人が氏の直接の指導にあづかり、またその雜誌は最も少いときでも二千にちかき讀者を有し、最も多いときは四千三百に達する有様であつたから、またその數十種の著作もかなり讀者を吸収したから、直接間接に氏の感化に浴した者は、教會の外内にわたつて非常な數に達したといふべきである。故にこれらの人の間にいまでも、無教會的精神がみなぎつてゐるのである。

第三 現 状

内村氏は聖書を講じて人を導いただけで、傳道者を養成することはしなかつた。氏は誰に向つても同じ講義をしただけであつて、若干の人に向つて特殊の教育をほどこす様なことはしなかつた。しかるに氏の門下から數名の人が、この世の位地とそれに伴ふ収入とを棄て、師に倣つて獨立傳道の道にのぼつた。これらの人はすでに氏の生前から傳道を開始した。年代順でその名をあげれば、淺野猶三郎、畔上賢造、藤井武、黒崎幸吉、塚本虎二、江原萬里、金澤常雄等である。これらの人はいづれも聖書研究會を起した人々を指導し、一人を除く他は聖書雜誌を創刊した。この

うち藤井、江原の二人はすでに故人となつたために、その雜誌も集會も解消したが、その他は依然として繼續してゐる。これらの人々の雜誌と集會はその師ほどには多くの人を牽きつけてはゐないけれども、とにかく各々の持場にあつて働きを繼續してゐる。この人々の運動によつて、無教會的基督教の性質が益々明かとなり、今や動かしがたき勢力となつたのは事實である。

これに促されて教會側から各種の雜誌が簇出したが、いづれもあまり多くの讀者を得ない様であり、中には經營困難の結果すでに廢刊したものもある。しかるに所謂無教會の諸雜誌は各々相當の讀者をえて、ともかくも元氣よくつづけてゆく。未だ廢刊したものは一つもない(主筆の死去した場合は別である)。誇るために云ふのではない。また將來のことは分らない。唯現在の事實を云ふのである。

無教會運動は新宗派をつくることではないから、全體を統合して一のオルガニゼーション(組織)にはしない。いはゞ一人一黨主義であつて、各自の行動は絶対に自由である。だから同志の者の數などは分らない。たゞ教會の内にも外にも、同じ精神の上に立つてゐる者の多いことは確かである。殊に全國の處々に於て、教會以外に平信徒の團體が出来て、それが相當の數にのぼつてゐる。彼等は別に教師を持たないで、所謂無教會雜誌を指導者として、聖書研究の集りを繼續し、祈をともにしてゐる。まだまだ殖える模様である。その同志の數に於て誇るに足る程多くはないが、無教會主義は確かに一の力ある流となつてゐる。今やこれを無視して日本に於ける基督教の傳道を語ることは出来ない。われらは決して人を勧誘して同志とはしない。殊に教會員に對しては、つゝしんでその立場を尊重して、いつまでも教會員としてとゞまることを希つてゐる。教會から退去したく思つてゐる人の相談を受けたときには、われ

らは常に教會にとゞまることを勸めてゐる。しかしわれらには何の相談をもしないで、遂に堪へかねて教會を脱し、そしてわれらの群に投ずる者がある。彼等は皆眞面目な人達である。そして異口同音に、教會生活の矛盾と偽善に堪へ難しと云ふ。教會に屬してゐる者の中にも教會に對する不満から、無教會主義に共鳴してゐる者がかなりある。これらの事は東京大阪等の大都會に限つたことではなく、全國を通じて一の傾向となつてゐることである。

第四 教會に對する抗議

既に無教會主義と名づけるからには、それが現代教會に對する反動であることは明白である。然らばどんな點に於てわれらは現代教會に對し不満を感じてゐるか。

先づカトリック教について言へば、そのすべてが異教的であるとわれらは斷言する。その組織からみても、その制度からみても、その精神からみても、その行事からみても、カトリックは全然異教的であつて、われらがこゝで問題とするに足りない。故に日本のプロテスタント教會（所謂新教會）のみについて云はう。

第一 プロテスタント諸教會は、教會を信者以上に貴んで、教會のために信者を犠牲にする精神が強い。これわれらが謂ふところの教會第一主義、若しくは教會主義である。自分の教會を盛にするために、教會員を酷使し又は極度の犠牲を拂はしめることが多い。教會維持の爲めに多額の寄附金を要求するやうなことが度々ある。會堂新築の資金を得るがために日夜勞苦して奔命に疲れ、最後にはその貯金の全部をも獻げしめられた勞働者がある（之は實話である）。教會の運動に使はれて學事を放棄するやうになつた青年などは、その數が随分多いと思ふ。或はまた自派以外の

人の著書を読むことを禁じて、研究と思想の自由を奪ふやうな教派さへある。一言にして言へば、これらは何れも教會主義のあらはれであつて、個人を集團の奴隸とするものである。これは明かに、一匹の迷へる羊を尋ねるためには、九十九匹を野に置いて馳せゆくといふ基督教の根本精神に背馳するものである。無教會主義は、決して集團を否定するものではない。兄弟姉妹の温き交りは、まことにあつて欲しいものである。そして事實として無教會信者の間にも、全國にわたつていくつかの集團がある。唯われらの反對するものは教會第一主義——即ち教會のために個人を犠牲にしてはゞからぬ精神である。この教會第一主義が不幸にして日本の新教會に彌蔓してゐる。この惡精神に向つては、無教會主義は眞正面から抗議する。

第二 日本の新教會の大部分は米國ミッションの仕事として始まつたものである。既に獨立した教會もあるが、その成立、組織、精神及び遣り口からみて、どう考へても彼等は米國教會の出店である。異臭紛々たるものがある。純粹の日本人から見れば甚だ面白くない。日本人の心と合はない。米國の基督教と云つても全部が悪いわけではない。良い教會もあり、良い神學校もあり、良い信者もあるであらう。けれども大體からみて、基督教は米國に於てかなり俗化したと云はねばならぬ。このヤンキーくさくなつた基督教をそのまゝ、日本へ持つてきたところが、國民性を全く異にした日本人の心に合ふ筈がない。米國の傳道會社はこの世の商事會社のやうな組織や方法を以て、日本の教化に當らうとする。その宣教師の多くは、會社の事務員そのまゝである。そのすべての遣り口が商賣的、打算的である。従つて日本の教會は非常にアメリカ臭い。米國はその享樂主義を以て日本人の道德的良心を汚し、その低級な基督教を以て日本人の靈魂を害ふ。例をあげれば澤山あるが、その一として俗惡な傳道法を擧げることが出来る。宣傳また

宣傳、恰も瓦斯屋が瓦斯風呂の宣傳を街頭でやるやうに、わめき立てるのや、或は又しつこく人を追ひまはすやうなやり方は、いづれも心ある日本人の眉をひそめることである。日本人の宗教に關する考へ方は、もう少し高尚である。無教會主義は、米國化した基督教の直輸入に對してあくまでプロテストしようとしたものである。

第三 われらの見るところによれば、日本の教會はこの世と妥協し、或はこの世に降参する點が多い。この世と戦ふのが基督教の使命である。「なんぢら世をも世にある物をも愛すな。人若し世を愛せば、御父を愛する愛その衷になし」(ヨハネ第一書二・十五)とは、基督教の根本的精神の一である。この世と戦はぬところにクリスチャンはない。この世と戦はぬところに基督教會はない。この世と妥協し、この世に降参する基督教會は效力を失つた鹽である。「外に棄てられて人に踏まる、のみ」である(マタイ傳五・十三)。然るに日本の基督教會が、基督教會をして基督教會たらしむるこの第一の條件を缺いてゐるのは、かへすがへすも遺憾である。一二の例をあげておかう。教會はとかく、その會員の中で、この世の地位の高い者を有力者として重んずる傾向がある。若し信仰に於て立派な人ならばよいが、多くの場合に於ては唯この世に於ける地位の故にその人を重んずる——その人の信仰は甚だ怪し氣であつても、また未信者に對する場合にも、この世の有力者の前に頭を下げるやうなことが多い。また會堂を新築する場合などには、映畫會などを催し、または漫談家などと呼んできて、不信者の享樂心に媚びて、彼等から少しばかりの金を貰はうとする。かくのごときをこの世に降参する者と云はないで、何と云はうか。彼等は「キリストとベリアルと何の調和かあらん、信者と不信者と何の關係かあらん」(コリント後書六・十五)との、使徒パウロの言葉を何と解釋するであらうか。この世と戦つて勝たねばならぬ教會が、戦はないのみか却つてこの世に降参するといふのは、天が墜ちて地とな

つた程の墮落ではないか。この存立の土臺を失つた教會に對して、無教會主義は徹底的の反省を促すものである。

第四 無教會主義は形式を問題としないけれども、今の教會の組織の上に一つの大きな根本的な缺陷を認めるものである。それは多くの教會に於て(すべてではないかも知れぬが)、牧者が恰も教會員の雇人であるかのごとき有様であることである。表面はとにかく、事實はサラリーを出して牧師を雇つてゐるやうなことになつてゐるので、とかく牧師を雇人扱ひにする。従つて牧師の中にも、信者の機嫌をとるやうな人が相當に多い。雇人のやうにして酷使しながら、聖日には神の代辯者の如く説教せよといふのは、盲人に向つて道案内を要求するやうなものである。信者の御機嫌をとるのに忙しいやうな人に、どうして立派な説教が出來よう。どうして信者の魂を導くやうなことが出來よう。自分の教會の牧師について満足と感謝を感じてゐるやうな教會員が、どれ程わが國にあらうか。大抵の教會員は、蔭で牧師の悪口を云つてゐるではないか。自分達が少しも尊敬してゐない牧師から説教を聞いて日曜の禮拜を守らねばならぬとは、何といふ不幸なことであらうか。所謂有力者といふ者が教會を支配してゐて、牧師はそれに屈服してゐる有様であるので、比較的優秀な牧師はそれをいさぎよしとしないで教會を去る。そのために牧師の人物は益々低下するといふ有様である。斯様な有様で、牧師も會員も深き不満を心に抱いてゐるやうでは、その教會にどうして力があらうか。人數は少くも、満足と感謝がみなぎつてゐれば、そこには犯し難き氣品もあり、充ち溢れる力もある。數の多いことのみを求めても、不満が鬱積してゐるところには何一つ良いものがない。以上のやうなわが國の教會の實狀に對して、われらが遺憾の言葉を發するのは、まことに已むを得ないではないか。

第五 大體から眺めると、今日の教會は基督教を鬻ぐ商店のやうに感ぜられる。牧師はその商店の番頭であつて、

來會者は顧客のやうに見える。牧師は會衆を一人でも多く牽きつけようと、種々の方法を講ずる。來會者に向つて、盛に愛嬌を振りまく。散會する際には、會衆に向つて御禮の言葉を述べる。従つて會衆の方でも、お客様のやうな顔つきをして傲然としてゐる。福音を教へる方にも教へるといふ權威がないし、教へる方も教へる者の謙遜がない。そのため、集會の空氣に嚴かなところが少しもない。その集會に出席してみても、何となく襟を正すやうな心持の起らないのは、それが神の教會でない證據である。もと／＼神の福音を聴かうとして人の方から度んで教を乞ひに来るのが本當であるのに、こちらから頭を下げて人に來てもらふ有様である。全く主客顛倒である。これを例へてみれば、代議士を選挙する場合に、選挙民の方からお願ひして代議士になつて貰ふのが本當であるのに、代議士の方から一生懸命お願ひして選挙してもらふやうなものである。この主客顛倒が政界腐敗の主なる原因であるならば、かの主客顛倒も教會腐敗の主なる原因ではあるまいか。

無教會主義から教界に向つての抗議は、以上を以て盡きてはゐないが、その主なる點は、およそ右のやうなものである。

第五 無教會主義についての誤解

無教會主義に對して種々の批難を加へる者があるが、いづれも根本的な誤認の上に立つてゐるのは遺憾である。その二三を次に擧げよう。

第一 無教會主義についての最も大なる誤解は、それが集團を否認して各人の孤立を重んずると看做す點である。

斯様な誤解の上に立つてわれらを非難するは全く的の外れである。無教會といふ言葉は、今の教會を對象とする意味のものであつて、決してクリスチャンの集團を否定する意味の言葉ではない。同じ主を信する者が兄弟姉妹として相結ぶことは、必然的に起ることであつて、且つ喜ばしいこと、感謝すべきことである。信者の團體のことを原語のエクレシーヤと云ふが、このエクレシーヤは基督教に當然伴ふべきものであつて、苟もクリスチャンであるならば之を否認することは出来ない。現に無教會者の間にも、聖書の研究と信者の交りとを目的とする集團があり、また兄弟姉妹の濫き關係もある。尤もそれらの間に、どの集會にも出席しない者もあるが、それはその人自身の都合によるのであつて、決して集會そのものの存在を否認するのではない。教會信者の中にも、教會に出席しない者があるのと同じことである。無教會者は決して孤立ではない。天下に朋は多い。われらは決して集團を否認する者ではなく、また孤立を貴ぶ者でもない。

第二 われらに對する第二の誤解はわれらを以て獨善主義者と見做すことである。即ちわれらを以て己獨りを善とし、己のみ眞理を持てりと誇り、己のみ救はれ、ば可なりとなし、徒らに他を排撃して喜ぶ者であると思はれること——これが教會者の無教會者に對する見方である。

無教會者と言つても数が多いのであるから、斯様な矯激な思想を抱く者が少しはあるかも知れぬ。二三の過激な者を見て、それを以て全體と見做すのは、砂原の中で二三の石を拾つて、全體を石原と見做すやうなものである。われらは決して徒らに他を排撃する者ではない。日本を愛しキリストを愛するが故に、見るに堪へぬ事がある場合には反省を促すまでのことである。また自己のみを善とはしない。他に長所があれば、度んでそれに敬意を表する。己に缺點

があればそれを改めようとする。またわれらは己のみ救はれて満足する者ではない。日本人全體の、また人類全體の救はれんことを祈り求める。常に傳道の必要を痛感し、そのために出来るだけのことはしてゐる。何事も思ふ様に出來ないのは人の常であるが、少くともわれらの志すところは茲にある。われらの外の姿に於て、教會のそれと大分ちがふところがある。われらの同胞愛のあらはれに於て、また傳道の仕方にて教會のそれとはかなりちがふものがある。しかしその故を以てわれらを獨善主義者と見做すは大なる誤認である。

第三 われらを以て教會の敵と見るのも大なる誤解である。われらは寧ろ教會の根本的改革を祈つて已まぬ者である。教會を退會してわれらの群に投ずる者が多いといふ事實を捉へて、われらを教會破毀者と見る者がある。しかしこれはわれらの罪ではなくて、その教會の罪である。若し教會がその會員に充分の靈的満足にあたへてゐるならば、外部からいかなる反對が起つたとしても會員がその教會を去る筈がない。否外部からの反對があればある程、益々熱心にその教會を擁護すべき筈である。然るに外部からの聲にひかれて教會を去るといふのは、教會が充分の満足にあたへてゐないからであつて、偶、以て教會の弱力を語るものである。われらは教會の會員を自分の方に誘はうとしたことなど一度もない。われらは唯眞理と信ずるところを説いてゐるだけである。若しそれに共鳴して教會を去る者があつたと言つても、われらは如何ともすることが出来ない。勿論去就に迷つて相談する人があつた場合には、われらはその人の教會にとゞまることを極力勧誘する。他の團體に敬意を表して一指をもそれに觸れないといふのが、すべての傳道者の道徳でなくてはならぬ。斯様なわけであるから、教會側からわれらの群に投ずる者は、われらに何の相談もしないで來てしまつた者である。來る者は拒まず去る者は追はずといふのが、われらの傳道方針であるから、か

くなつてしまつた人をまで斥けることは出来ない。従つて結果から見れば、無教會主義は教會の敵のごとく見えるかも知れないが、事實は決してさうでないのである。

第四 無教會主義を無活動主義と誤解する人がある。或る有名な女流教育家が、働くことを罪惡視する潮流が基督敎界の一部にあると云つて、無教會的基督敎を非難したといふ話である。恐らくこれはわれらの信仰第一主義を誤認したからのことであらう。われらは信仰のみに依つて義とされるといふ福音主義を高調するけれども、これは決して人間の活動といふものを輕視する者ではなく、勿論罪惡視する者ではない。われらは正常なる活動は信仰の結果生れるものであるとすものであつて、活動或は事業を信仰の上に置くことに反對するのである。活動そのものを生命とし、信仰をその器とするやうな行き方は、聖書の根本思想に反するものとしてわれらの排撃するところである。しかし信仰から溢れ出づる活動、また信仰の従者としての行爲であるならば、われらは之を無用視するやうな心は少しもなく、われらは寧ろそれを貴ぶ者である。信仰は人を救ふけれども、活動は人を救はない。然るに世には活動を以て人を救ふ神であるやうに考へる人がある。斯様に人生の深き事實に對する認識を誤つてゐる人達が、われらを捉へて無爲の輩と見做すのである。事實は最上の雄辯であると云ふが、實際無教會者は決して怠惰ではない。われらは人一倍勤勉であるとは言はないが、人並ぐらるには勤勉であるつもりである。われらの多くは働く時間の少いことを歎じてゐる。少くとも人々に比べて怠惰であるとは思はない。これは事實の問題であるから、くらべてみれば誰にも分ることである。

第六 聖書的基督教の提唱

無教會主義は聖書の信仰に對する正しき認識を出發點とする。故に先づ聖書の研究を重んずる。今の教會は所謂説教ばかりを聴かせて、聖書そのものを教へない。ほんの申譯に聖書研究をする位の有様である。然るに近頃は教會側でも聖書研究の必要を感じたと見え、聖書の研究を目的とする雑誌などがあらはれはじめた。之は明かに無教會の眞似をしたのである。聖書研究の必要は、我が國に於ては、内村鑑三氏によつてはじめて提唱されたのである。明治卅一年に、氏が「聖書之研究」といふ雑誌を創刊しようと決意し、氏の先輩であつて聖書翻譯者の一人である某氏にこれを語るや、その人はそんな雑誌は購讀者もなくまた二三號も書けば材料が盡きるのであらうと語つた。基督教會の長老さへ斯様な有様であつた。然るに内村氏はそれに屈しないで、その雑誌の發刊を斷行し、遂には基督教の雑誌として最大の部数を發行するまでに至つた。

聖書は基督教の經典であるから、クリスチャンは何をおいても先づこれを研究すべきが當然であるのに、それをしなかつたといふのは、當時の基督教會が如何に變態的であつたかを示してゐる。内村氏は今から見れば、當然の事をしたにすぎぬやうであるが、その當時としては非常な卓見の持主であり、また一切を擲つて冒險的事業に突進したわけである。氏の理想は、聖書を以て日本の國民的經典となさんとするにあつた。若し日本人が論語や孟子を読むやうに聖書を読む日が到來するに至れば、日本の教化は期して待つべしといふのが氏の考へであつた。この主張が氏の無教會運動の根柢をなしてゐることを人々は見落してはならぬ。

教會が聖書を説かないで、説教ばかりを聴かせるのは、近代歐米の人文的科學の影響のもとにある歐米教會の眞影をしてゐるのである。これは聖書よりも人間の智慧に重きを置くことであつて、教會の現世的墮落の大原因である。同じ様な説教を日曜毎に聴かせられるだけで、聖書はあまり教へられないのであるから、基督教の中心をはずり擱んでゐない名ばかりの信者が澤山出来る。基督教の中心的生命をしかと把握するためには、當然聖書においてそれをさぐらねばならぬ。然るに此事を忘つて、どうして信者に力があらう、どうして教會に力があらう。歴史を見るに、聖書を學ぶことを忘つて教會は衰微し、聖書を學ぶことによつて新機運が起る。内村氏のこの運動は聖書研究による新機運の創始である。氏は自ら聖書研究に没頭し、また聖書研究の必要を唱道し、日本の基督教界に新紀元を起したのである。

大正時代に入つたころから聖書研究の熱心が氏の門下の中から盛になつた。新約聖書をその原語であるギリシヤ語で讀まうとする人が、かなり多くなつた。舊約聖書に對する研究心も盛になつた。英米人で今ではあまり讀まないやうな古い註解書が英米の古本屋の店頭からひき抜かれて、日本の若き學徒の書棚を賑すやうになつた。この現象は今でもつゞいてゐる。そして此事は、宗教書類を取扱ふ英國の古本屋仲間などにおいて、一の驚異的事實であるさうである。

無教會主義がどんな悪影響を日本の基督教界へあたへたとしても、それが聖書研究の熱心を促したことは事實である。聖書雜誌の發行においても聖書研究の熱心においても、事實上教會側は無教會に追隨して來たではないか。これは明白な事實であつて、如何に無教會主義を目的とする者でも否定することは出来ない。たゞ眞似事はとかくうま

くゆかないものであるから、教會側が充分注意して立派にやつて下さる事をわれらはお願ひする。何もわれらは本家争ひをする者ではないが、無教會主義が聖書の研究を出発点としてゐる事は、歴史的にも理論的にも事實である。

第七 信仰第一主義の提唱

すでに聖書を基礎とするからには、無教會主義はあくまで聖書の根本的真理の上に立つてゐる。聖書の根本的真理とは何であるか。それは救はるゝためには信仰のみを必要とするといふ事である。それをパウロだけの基督教であるやうに言ふ人があるが、われらはそれが聖書の一貫した救拯の大原理であることを認める。その理由はなぐなるから茲に述べることは出来ないが、われらのみならず、所謂福音主義の基督教といふものは、何れもみなこの一義の上に立つてゐるのである。

然るに今や律法の外に神の義は顯れたり、これ律法と預言者とに由りて證せられ、イエス・キリストを信ずるに由りて凡て信ずる者に與へたまふ神の義なり。之には何等の差別あるなし。(ロマ書三・二一、二二)

我らは思ふ、人の義とせらるるは、律法の行爲によらず、信仰に由るなり。(ロマ書三・二八)

律法の行爲に由りては義とせらるる者、一人だになし。(ガラテヤ書二・一六)

これらの聖語は、いづれも救拯に關する根本原則の提唱である。これは義とせらるゝためには信仰のみが必要であることを説いたものであつて、信仰のみに由つて凡ての人が無差別的に義とせらるゝことを主張し、凡ての律法的形式を不要としたものである。形式のあることを妨げはしないが、形式は生命でないから無くても少しも差支ないといふ

のである。形を以てする人間界の差別は、救といふ觀念からすれば全然無である。いまはユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隸も自主もなく、男も女も無し(ガラテヤ書三・二八)とは救に關する聖書の大原則である。あらゆる形を問題としないのであるから、これを基督教の普遍主義と名づけることが出来る。即ちあらゆる人間界の差別を無視して、救の一道を以て貫くのである。

この見方からすれば、クリスチャンとして洗禮の有無のごときは問題とならない。人は洗禮によりて義とせられず、信仰に由りて義とせらるゝからである。従つてわれらは人に洗禮を勧めたことがないとともに、人の洗禮を受けようとするのを妨げたこともない。内村氏のごときは、入信當時洗禮を受けたし、また洗禮を望む者に向つて、その人によりその場合によつては、洗禮を授けたこともある。しかし氏は洗禮の必要を説かなかつたから、氏の教を受けた者の大部分は洗禮を受けなかつた。私のごときは自ら洗禮を受けないし、また廿餘年間傳道をして來たが、一人にも洗禮をほどこしたことはない。これは洗禮を受けてはならぬといふのではない。洗禮は受けても受けなくもよいといふのである。若しも洗禮を受けてはいけないなどと主張すれば、信仰の他に或る形式を救の條件とすることになつて、聖書の根本原理に反くこととなる。これを要するに無教會主義は、洗禮などの形式觀念を全く自由問題として、人々の隨意に任せるのである。洗禮問題については茲に詳しく述べることは出来ぬけれども、それを救の絶對的條件としないといふことは、救拯に關する聖書の根本原則に訴へて明かである。

然るに現今の教會は、教會の他に救なしと高調する。教會に加入するには必ず洗禮を受けるのであるから、教會側のこの主張は、つまり洗禮を受けなければ救はれないといふことである。これは明かに聖書の根本原理に反くのみな

らず、教會にのみ救をみるといふのは差別主義に墮したものである。教會の名ある牧師某が或る修養會の講演において、神は四壁の中にのみ在りと廣言したとの事であるが、これは神を教會の中に閉ちこめる差別主義である。神は在さざる處がない。神の真理は宇宙に遍滿してゐる。救の音づれは教會以外にもある。神は現今のやうな教會の壁の中よりも寧ろ山の頂きに、森の蔭に、河のほとりに、或は人が其の勞苦にいそしむところに居給ふ。若し聖意に適ふやうな良い教會があれば、神はその中に居給ふに違ひない。救もその中にあるであらう。しかしこれを教會に限るがごときは救を獨占せんとする暴擧である。

人は集團に加はつても加はらなくても、キリストを信ずることのみに由りて救はれる。形式の有無は、人の救には直接の關係がない、人は教會によつて救はれるのでもなく、また無教會によつて救はれるのでもなく、唯神によつて救はれるのである。神は救はんと欲する者を救ひ給ふ。形式を以て神の救を妨げようとするのは、恐るべき冒瀆である。無教會主義は、この種の真理歪曲を基督教界から根絶せんがために戦ふ者である。決して救が己にのみあるとは言はぬ。若し斯様なことを言へば、教會主義同様の差別主義になつてしまふ。この差別主義を打破するのがわれらの目的であるのだから、自分の立つてゐる土臺の下に穴を掘るやうな馬鹿げた事をわれらがする筈はない。神の恩恵を形式を以て抑へないで、空をわたる風のやうに、それを自由自在に流れしめようとするのが、われらの戦の眼目である。今や日本の國には、眞面目な信者及び求道者にして、教會に對して不満足を感じてゐる人が多い。彼等の或者は不満のうちには教會生活をつゞけ、或者は教會に行く事を避ける。人は各、傾向を異にしてゐるから、喜んで教會に出席してゐる人はそれでよろしい。また不満足を感じながらも教會に出席してゐる人はそれでよろしい。けれども教會に

失望して、その結果基督教より離れてゐる人に向つては、教會以外にも救のあることを示さねばならぬ。われらは斯様な人々のために、真理の所在を示すことを以てわれらの務の一部としてゐる。われらは自分の味方をつくらうとするのではない。救の真理を廣く天下に向つて示して、救はるべき者のために奉仕の役目に當らうとする。これが無教會者の使命である。

第八 日本的基督教の提唱

眞理は世界共通のものである。しかし宗教的眞理は科學的眞理とはちがつて、人々の生活に根を据ゑるものであるから、人によりまた民族によりてその色彩を異にするのが當然である。然るに日本の基督教會は、大體において歐米の基督教會そのまゝである。斯様な器械的翻譯のまゝでは、基督教が日本において力を持つことは不可能である。基督教がもつと日本のものとならなくては、基督教は永久に日本人に棄てられてしまふであらう。これわれらが日本的基督教を唱道する所以である。これは決して世におもねるのではない。當然しかあるべきことを言ふに過ぎない。

日本民族は模倣の民族であるといふが、たとへさうであつても決して器械的模倣のうちに充分の獨創味を加へるのが、日本民族の特徴である。佛教も儒教も外來の教であるが、今では日本がすっかりその本場となつてしまつた。これはそれらの教を日本人の心において再認識し、日本人の心に適ふ生ける教として信奉したからである。かく日本的に彩られたが故に、この二つの教はすっかり日本の土壌に根を据ゑてしまつて、今では日本固有の教のやうな外觀を呈してゐる。世界に向つて誇るに足るやうな幾つかの立派な僧侶及び學者を生み、佛教の寺院は全國に普く、儒教の

倫理的精神は人間生活の根柢をなすほどに至つた。實に偉觀なりと言ふべきである。この事において日本民族は、世界に向つて如何に誇つても差支ない。茲に日本民族の明白な特徴がある。

だから私は基督教をも、「日本的」といふ形容詞なくしては考へ得ない。日本的獨立といふことは、われらが基督教を信ずるについても、説くについても、第一條として高く掲げる最も大切なものである。或人は基督教の全人類性を説いて、われらのこの考へ方を初代教會の一派たりしユダヤ派の如き固陋なものとして嗤ふであらう。「かくてギリシヤ人とユダヤ人、割禮と無割禮、あるひは夷狄・スクテヤ人・奴隸・自主のわからぬ事なし、それキリストは萬の物なり、萬の物のうちにあり」(コロサイ書三・十一)との語を引用して、人類的基督教のほか何ものもなしといひて、私をいましめるであらう。しかし之は一を知つて、二を知らぬものである。基督教といふものがたゞ或る一定の教理の、型にはまつたまゝの者であるならば、それは數學や科學のやうに全く民族性を離脱したものであらう。しかし基督教が活ける生命の供給者である上は、それがそれを信奉した各個人に於て互に趣きを異にするやうに、それを受けた民族によつて特異の姿を呈するのは極めて自然のことである。水は方圓の器に従ふといふことは、この場合にもたしかである。

數學はどの國にでも同じである。アメリカやイギリスで、2と2を加へて4であるものが、日本に來てるとなる筈はない。しかし神の福音は、その本質こそ變らぬけれども、たしかに民族によつて特殊のものとなることは明かである。各民族が基督教を採受しても、個性のない民族となる筈がない——各個人も然るやうに。いや、それどころではない。基督教を信受して各人の個性が一層あざやかに浮動するやうに、基督教を受けた各民族はその民族的個性(民族の特徴)を一層明確に外にあらはすに相違ない。この點は一個人も、一民族も同じである。「一國におけるも一人におけるも凡て同じ」(ヨブ記三五・二九)とあるは本當である。されば、各信者がキリストを信ずる者として、おのその特殊の發達をしないならば、そして十把一からげのクリスチャンであるならば、それは死んだクリスチャンであるやうに、各民族がキリストを信じてその特殊相を發揮しないならば、それは基督教民族としては死せるものである。

歐米の基督教會はこの一義を見落して、自分たちの民族性で彩られた基督教をそのまま機械的に日本の國に押入れた。即ちアメリカ的、ドイツ的、もしくはフランス的基督教をそのまま日本に植ゑようとした。根本に於てかやうな無理をした故に、彼らの東洋傳道は失敗に了つた。されば今に至つてやうやく日本の靈的獨立を認めんとするに至つた(彼らが日本から手を引くことは、もはや時間の問題となつた。彼らは打算的の民族であるゆゑ、長年試みても効果ないと氣づけば、手を引くのである)。

見よ、歐米人のもつて來た基督教會が、日本に於てどんなに墮俗な歩み方をしたかを。打算的な、事業本位な、商會社と少しも選ぶところないやうな、そして明白になつたコムマーシヤリズムとキャピタリズムに降参したものと、厚顔無耻の道を歩いたではないか。今でも歩いてゐるではないか。讀者よ、友よ、われらを以て、徒らに教會攻撃をして快を取るものと思ふ勿れ。たゞ我らは、白色人種がその墮俗な精神と方法とを以て基督教を日本に傳へたといふ事實そのものを指摘するだけである。そしてこの根原に横はる惡を剔抉して、日本のために新たなる歩みを提唱したのである。

日本の基督教會よ、その歐米的の殻を早く棄てよ。基督教國として最も破廉耻な歩みをつゞけて来た彼らが、商會社を経営すると少しも違はぬ考でやつてゐた基督教會を日本にもつてきて、そのまゝ日本の純潔な國土に植ゑようとしたのである。かくて神聖なる靈的處女地は鼠賊の泥足に汚されたのである。もと／＼これが日本のプロテスタントの起原であつて見れば、それが今日のやうに行づまつたのは當然である。見よ基督教會は何といふ寂れ方であることよ！ 大都會にある一流の教會といつても、多くは無理な會堂建築をして今や負債に苦み、相手かまはず寄附を仰いでゐる。何と恥づべきか！ 或はブルジョアの御機嫌とつて、辛うじて生きてゐる。中以下の教會に至つては、集まる人々も寂々寥々、わづかに存在をつゞけてゐると云ふに過ぎない。たとへ集まる人は少くとも、生氣の溢れるものがあるべき筈である。然るに何一つ力のあるを見ない。たま／＼生氣のあるらしきものがあれば、それは低劣野鄙のやからである。みなもと濁りて末の清からう筈がない。みなもとが清くも、とかく末は濁りやすいのであるから。日本の基督教會よ、その歐米的の殻を早く棄てよ。そして純日本的事物として立ちあがれ。このほかに生命はない。われらは歐米人のもつて来た教會法・傳道法を棄てるにとゞまらず、その神學の影響をも一まつ脱さねばならぬ。日本の基督教會が歐米神學界の動搖に引ずられて、彼らが猫の目のやうに變ると一緒に變るやうな不見識ではだめである。見よ數年前まではドイツの高等批評や、アメリカのモダニズムの足下に膝いてゐる者が、近頃はまた忽ち人間バルトの膝下に腰をかゞめる有様である。自分に堅く據るところがないから、こんなに淺ましく流行思想にひきずられるのである。神學校の教授諸君よ、教會の牧師諸君よ、諸君の手には聖書はないのか、永遠に不動なる神の言はないのか。なぜ聖書を充分に學ばないのか。なぜ生ける神の言をながしろにして、人間の思想を重んずるのか。「神の

言は生命あり、能力あり、兩刃の劍よりも利くして、精神と靈魂、關節と骨髓を透して之を割り、心の念と志望とを驗すなり」(ヘブル書四・十二)とあるを忘れて、無力な人間の思想を喜び求めるのか。そしてそれを頭の中に無理に押し込んで學者ぶつて、神經衰弱になつて苦しんでゐるのか。

日本人は日本人の心を以て、あらたに聖書を學ぶべきである。バルト神學などに心を奪はれなくてよい。たとへバルト神學が大體に於て聖書の信仰を支持すとは云へ、聖書の上にならぬ立つてゐれば人間の編んだ神學などはなくともよい。或は、ない方がよい。尤もわれらは、聖書を學ぶについて、西洋人の研究したものを参考とすることを否むやうな頑冥者流ではない積りである。辭句の解釋などにおいては、やはり彼らの研究を或程度まで重んじなくてはならぬ。しかも日本人には、日本人特殊の聖書の味ひ方があるべきである。文字の解釋はとにかくとして、その精神をつかむ上に於て、それを體得し體驗する上において、そしてそれを己の生命とする上において、日本人には日本人としての行き方があるべきである。要するにわれらは聖書を日本のものとしなくてはならぬ。これを外國の宗教の經典のやうに考へて、外國人の慣用する方法に盲従して之に對してはならぬ。日本人は日本人として獨立に立ちあがつて、あらたに人類の書たる聖書に對し、これを日本民族への神よりの啓示として味讀・味解せねばならぬ。

またわれらは集會の組織及び傳道法において、歐米の古外套をぬぎすて、日本の國土にかなふ道であらたに選ばねばならぬ。あんな重苦しい外套は、日本の國土に合はない。あまつさへその甚だしく古物なるをや。古外套の汚い、不似合なのは一刻も早く棄てて、自分の體格にかなつた衣を纏はねばならぬ。借着は體に合はない。早く持主に返してしまへ。そして自分に適した衣をとゝのへよ。

日本人は曾て儒教や佛教をどんな風にして傳へたか、その事を知るは大なる助である。とにかく儒教も佛教も、歐米人のやるやうな商賈主義には依らないで日本國の津々浦々まで弘まつたのである。求道者や信者をお客様扱ひになどはしないで、堂々權威を保持しつつ、立派に傳へ得たのである。ひとり基督教について、歐米人の墮俗的方法に據らねばならぬ筈はない。殊にそれらを日本民族の精神的財産として傳へた故に、外國人から資金を貰つて傳へようなどは、日本に於て曾て夢にも考へられなかつたことであるを思へ！日本民族よ、今もなほ獨立を確保せよ。決して歐米人の奴隷となるな。そして日本の基督教を樹立せよ！

但し誤解を防ぐために一言しておきたいことがある。日本思想の再認識といふ聲も近頃盛になつたが、日本思想と言つても全部が立派なものとは限らない。われらは無批判的に日本思想を是認して、それと基督教とを結びつけて鵠的な新宗教をつくらうとするのではない。かやうなことは、基督教の本質からみて到底出來ないことである。またしはならぬことである。けれども日本既有的思想で基督教の精神になつてゐるものがある。それをあくまでわれらは保続したい。基督教の立場からみれば、日本の過去の精神的財産のうちで、何が基督教の精神になつてゐるか、何が反してゐるかは、おのづから分ることである。このうちから甲を探り乙を棄てて、換言すれば日本の精神的土壌をきよめて、その上に基督教を植ゑてその成長をはかること——これがわれらの所謂日本の基督教である。

基督教はいかなる場合においても、世論におもねり俗流に投ずることは出來ない。この世と戦はなくては、基督教はその力を失つてしまふ。さればわれらが日本の基督教を唱道するのは、日本思想流行の現代に媚びるからのことではない。無教會主義は既に數十年前から、日本的といふことを力説してきたのである。われらは基督教が日本全體に

ゆきわたつて、他の凡ての宗教や思想に代る日を期待する者であつて、決して他の者と妥協しようとはしない。たゞ他の者の中にある貴い點、例へば日本人が佛教や儒教を信じてあらはした高貴な精神を今日に活かして、それをわれらの信仰生活の強い要素としようとするのである。

基督教は世界萬民に通ずる普遍的原理を提唱する人類の宗教である。水や空氣が世界共通であるやうに、基督教も世界共通である。一民族だけに限られるやうな民族的宗教ではない。けれども事實問題として、それが各民族の活ける精神に吸収されてその民族の宗教となつて、はじめて活力をあらはす者となる。故に日本においては、日本民族の宗教とならなくては基督教は生ける屍として終る。日本において基督教の活きる道もこれよりほかにはない。

第九 無教會主義の傳道法

最後に無教會主義の傳道法について一言しよう。

先づ現在の實狀を述べれば、文書傳道においては無教會主義はかなりの力を持つてゐると信ずる。その傳道者達の著述は随分多く出で、みな相當に賣れてゐる。個人經營の雑誌は十數種にのぼつてゐるが、その主なるものとしては黒崎幸吉主幹の「永遠の生命」、金澤常雄の個人雑誌「信望愛」、塚本虎二の個人雑誌「聖書知識」、畔上賢造主筆の「日本聖書雑誌」、石原兵永主筆の「聖書之言」等がある。これらの雑誌に共通した特徴は、全くの個人經營であつて、誰からも經濟的支持を受けてゐないといふ點である。教會側の諸雑誌が、それ／＼何等かの財的支持を受けながらも經營困難であつて、最近においてその主なる二三が廢刊したと傳へられるのに、無教會の諸雑誌は、少くとも現在では

成立つてゐるのである。そして教會側ではその眞似をして、しきりに聖書雜誌を發刊する有様である。われらは誇るために此事を言ふのではない。第三者から眺めても、これは明白な事實である。

無教會の諸雜誌は特に定價を安くして賣らうとはしないで、みな相當な價を以て賣らうとしてゐる。またむやみに寄贈するやうなことはしない。傳道と稱して無代で頒布するやうな事はしない。その内容に對して敬意を持つ人が、代價を拂つて購ふのを待つてゐる。これは眞理に對する權威を要求するのであつて、豚に眞珠を投げあたへない事である。

われらはまた聖書研究のための集會を持つてゐる。塚本、畔上、金澤等は東京において、また黒崎は大阪において、それ／＼日曜日にてその聖書講義を公開してゐる。これらの集會は全く自由の研究會であつて、誰人の來會するをも妨げない。けれども手段方法を用ひて人をその會にひきよせようとはしない。その存在を示すだけであつて、殊更に宣傳するやうな事はしない。また來會を中止した人に向つて、再び來會する事をすゝめるやうな事はしない。來者は拒まず去る者は追はずといふ主義を堅くまもつてゐる。また教會が會員に向つて過重の負擔を加へる事實にかんがみて、これらの集會においては、來會する毎に少額の聽講料を拂へばよい事にしてゐる。たゞその要求するところは、來會者が眞面目な態度をもつて聽講する事である。

これらの集會の中には、とかく今の教會の中にならぬ不愉快な事や不満足な事はない。聖書を學ぶところがあつて且つその講師に對して相當の敬意を持つ者だけが集るのであるから、そして満足を感じない者はすぐ去つてしまふから、少くともその日その時においては満足と感謝をもつて集會を終るのである。いやいやながら來る者は一人

もなく、講壇に立つ者の悪口をかげで言ふやうな者もない。勿論完全な集會とは言ひ得ないけれども、來會者が喜んで集まり、喜んで散ずる集會であつた事はたしかである。

或者はわれらの傳道法を非難して、儒者のごとく自らを高きにおき、眞理を傳へるのに代價を取り、信者に對しては冷淡な態度をとつて彼等を慰めようとするだけの愛心を缺いてゐるといふ人がある。勿論われらは完全な傳道をしてゐるとは言はない。けれども、われらは儒者の精神を貴ぶけれども、儒者のやうに師弟の別をかたくとつて自分を高いところにおかうとはしない。人々を弟子扱ひにした事などは一度もないつもりである。文筆の事に多忙であるため充分に手のとまかない事は認めるが、出来るだけ人々の友達となつてたすけ慰めようと希つてゐる。たゞとかく牧師がやるやうに、人の御機嫌をとるやうな事は決してしないまである。

またわれらの集會を非難して、兄弟姉妹の溫さ關係が無いといふ人がある。われらの集會は聖書研究を第一義として立つてゐるから、その他の事は悉く従である。聖書が正しく學ばれ、各人の神に對する信仰が正しく守られれば、そのほかに強ひて求める事はない。しかしながら人々が集まる場所である上は、その間に信者相互の關係が起らないわけにはゆかない。強ひて求めなくともおのづから起る。そしてわれらはこの關係が常に信仰中心である事を求める。即ち靈的の關係である。教會では會員同士の交際といふ事を非常に重んずるが、たゞ俱樂部員のやうな關係たるに止まつて、主に在るまことの交りでないと言ひたいやうなものが多い。こんなつまらぬ關係を相互に持つても、この世の社交的關係のやうなもので何の益にもならない。教會に出席して、澤山の人と交際しても、まごころから出づる靈的の關係を持つてゐる人がどれ程あらうか。教會生活は賑かなやうなものであつて、却つて寂しいものではある

まいか。

以上のやうなわれらの傳道法は、完全ではなくとも、少くとも無害である。とかく教會にあるやうないやな事がつきまとはない。未だ完全ではないが、少くとも日本に適した傳道法である事は明かである。われらは福音を愛しまた日本國に福音の充つる日を期待して日本民族のために最上の道を考へるほかに他念ない者である。これが無教會主義、無教會的基督教、日本的基督教の根本的希願である。(終)

昭和九年一月五日印刷
昭和九年一月廿日發行
日本基督教會
第二回配本

不許複製

東京市田區一ツ橋通町二
編纂發行 株式會社 東方書院
代表者 三井昌史

東京市小石川區久保町一〇八
印刷所 共同印刷株式會社
代表者 君島 隆

發行所 株式會社 東方書院
電話九段三八四二
柳町東京六八六一

終